

<前回>オリエンテーション

後期：キリスト教と経済・環境

後期オリエンテーション

3. 自然神学の拡張と社会科学

- 3-1：自然神学とは何か
- 3-2：自然神学と社会科学
- 3-3：自然神学の規範的場としての聖書解釈

4. キリスト教思想と経済・環境

- 4-1：キリスト教思想から見た環境と経済
- 4-2：聖書と環境思想
 - 1：創造論から終末論へ 11/6
 - 2：社会的構想力——モデル、ヴィジョン 11/13
 - 3：エコ・フェミニズム 11/20
- 4-3：聖書と経済思想
 - 1：経済神学と聖書 11/27
 - 2：契約思想の射程 12/4
 - 3：イエス、パウロ、黙示論 12/11
 - 4：賀川豊彦とキリスト教社会主義 12/18
- 4-4：現代神学の動向から 12/25, 1/8,22
 - 1：プロセス神学
 - 2：政治神学
 - 3：科学技術の神学

<前回>自然神学の規範的場としての聖書解釈

- 1. 自然神学の社会科学の問題領域への拡張
- 2. モデルとしての狭義の自然神学
 - 聖書の創造論と自然学（形而上学）との共通の場としての「宇宙」
 - 宇宙の秩序と人間の位置、そして悪

↓

自然神学と聖書

- 3. キリスト教思想（神学）—聖書・聖書解釈—社会科学：社会、政治、経済
 - ・自然神学としての基盤・規範としての聖書学：
 - 神学と諸科学との接点・コミュニケーション可能性。
 - 神学と社会科学→人間学（人文学）、理念／現実
 - ・人格的社会的連関：親密圏から公共圏
 - 市民社会、国家・民族、国際・帝国
 - 性、家族

4. トレルチ『社会教説』

社会教説とは。教会、分派、神秘主義の三類型。自然法。経済、政治、家族。

Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1912 (*Gesammelte Schriften* 1. Scientia Verlag)

S. Ashina

<補足2>

Max L. Stachhouse, *Public Theology and Political Economy. Christian Stewardship in Modern Society*, University Press of America, 1991.

（スタックハウス『公共神学と経済』聖学院大学出版会）

Authority

These principles are Scripture, Tradition, Reason, and Experience --- the so-called "quadrilateral" (4)

cf. Paul Tillich

I have tried to argue throughout this book that we are called to be, above all, stewards of the Word. And that entails the necessary reclaiming and recasting of a public theology out of the classical warrants of Scripture, Tradition, Reason, and Experience. (174)

4. キリスト教思想と経済・環境

4-1: キリスト教思想から見た環境と経済

「環境と経済」：社会的なもの=家

- ・現在の二つの危機は連動している。経済危機と環境危機
過剰な自由主義のもたらしたもの
- ・「政治的なもの」の復権とその課題

(1) John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, and the Economy*, State University Press of New York Press, 2002.

Chapter Five. Nature, Community, and the Human Economy

Human Beings have always had an economy. ... In the contemporary world, the economy is imposed on the natural world in a particularly jarring fashion. It is far from natural!

The detachment from the natural world has been accompanied by breaking down natural relations among human beings as well. Human beings come to be in communities. In a profound sense the human communities in which they live create them. The economy of the modern world has broken down traditional communities. In its current global reach, this breakdown is being effected almost everywhere. (101)

The economic assumptions that guide global activity today are rooted in the dominant model of modernity. Of greatest importance are the individualistic view of human beings and the dualism of humanity and nature, with its resultant anthropocentrism. The modern economic model abstracts radically from human community and the interconnectedness of human life with other creatures.

Postmodernism sees matters quite differently. People are constituted by their internal relations to their bodies, to the wider world of nature, and especially to other people. Apart from these relations, they do not exist at all. They are formed and informed in human communities. It is in and through communities that they achieve true individuality and personalhood. The model that describes this best is that of persons-in-community. In attenuated form, the community in question includes the natural environment. (121)

From the postmodernist point of view, nature in its full diversity, remarkable capabilities, and severe limitations must be taken very seriously. If there is to be a sustainable future, the

complexity and interdependence of natural processes must be considered in ways that are discouraged by the modern economic model. The human economy is a subordinate element in the natural economy rather an autonomous system that can exploit the natural one indefinitely. We must find ways of meeting the real human needs of all and attaining a satisfying life that are far less consumptive than the lifestyles of the affluent today. (123)

(2) John B. Cobb, Jr., *Christianity, Economics, and Ecology*, in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.

1. 新しいコンセンサスと現状

①状況 (497/1,2)

- ・人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス
- ・現実にはほとんど変化を生じていない。

②歴史・問題の根 (497/3-499/1)

③技術／経済／エコロジー (499/2,3,4,5)

- ・科学技術は、経済とエコロジーを多様な仕方で関連づける
economy (oikos + nomos) / ecology (oikos + logos)

しかし、これらはまったく独立的に発展してきたのであり、最近まで関係性はほとんど考えられてこなかった。現在はむしろしばしば対立的に見られる。

2. キリスト教の問題性と課題

①キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか (499/6-501/1)

- ・科学技術は貧困を縮小する（必要なものを生産し雇用を創出する＝豊かにする）
- ・キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性（物質的な必要を満たすという目標の共有）
- ・人口増加・人口爆発（伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視）
医学の進歩、人間の生命を救うことは、我々の遺産・魂に深く根ざしている

②自然世界の保持へのコミットメントをはっきりと表現すること (501/2-503/1)

- ・科学技術のあり方の転換

これまでの科学技術は、労働力が少なく、資源と汚染処理スペースが豊富であった時代のものであるが、現在状況は反対になった。生産性とは労働生産性を最大化するのではなく、資源生産性を最大化することを目指すべきである。より少ない資源によって十分に有用な商品を生産すること。この点で、現在の科学技術には多くの改良の余地があり、キリスト教徒はこのシフトに躊躇なく賛成できる。

- ・個々の建物や都市全体を少ないエネルギーと資源によって建設すること
- ・資源の再利用・リサイクル
- ・食物などの農産物の持続可能な形式の発展、一年生穀物を多年生穀物に代える
- ・食生活習慣の変化による土地利用への影響

土地の適した利用（食肉用動物のための牧草地、穀物生産→人間が直接消費する）

- ・古代キリスト教の徳の復興

他者（地球に共に生きる生きた被造物すべて）の幸福のために自分を犠牲にする

→ 消費者志向社会からの撤退

すでに富裕である者は収入や財産の増加を進んで際し控えること。収入と富の再分配

についての公共政策の支持。

3. 政策レベルの問題とキリスト教

①税政策の転換(503/2-504/2)

- ・逆進的な税や給与税から資源税・汚染税へ

資源税：貴重な資源の使用に税を課す、良性のエネルギー資源の競争力を高める

汚染税：汚染処理の社会的コスト

こうした動きに対する異論：貧しい者はエネルギーや資源を買う余裕がない。

しかし、この税制の転換によって、一般に貧しい者の負担は軽くなる。所得税の元来の意図は、富の再分配であり、税の再分配的使用は可能である。

- ・建築や改築を無税に土地にのみ税を課す、土地投機を抑制し、有効利用を促進する土地の利益は共同体全体に属している（ヘンリー・ジョージ）

②税と予算による人口増加への抑制効果（歳入歳出政策）(504/3,4)

急激な人口増加が続く国々では、女性の地位の向上がもっとも重要

人類は持続可能な使用の限界をすでに超えてしまった。人口増加（総人口）と一人あたりの消費の不必要な増加とを、抑制しなければならない。

4. 経済成長とキリスト教

①キリスト教徒は支配的な経済的实践と理論とを批判しなければならない(504/5)

経済成長至上主義を断念すること。倹約を支持するキリスト教的価値の内面化。

②成長自体とそれを達成する政策との区別(504/6-506/2)

経済的成長自体はエコロジーの敵ではない

放棄できない特定の目標と一般化された経済成長（破壊的）との区別

キリスト教の目標はすべての人々が良き（快適・健全な）生活のための物質的手段を持つこと

③成長志向的な政策と権威主義的な強制によらない貧困の克服の例(506/3,4,5,6)

インドのケララ州の場合：女性による女性の教育

5. キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係

①キリスト教共同体内での必要性(506/7-507/3)

地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること

→ 神学の悔い改め：人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考えることによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情における、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復

②元来の意味に従って、経済とエコロジーとの連関を見直すこと(507/4-508/6)

家全体（人間とその他者）の研究、この家を秩序づける規則、現実の経済活動がこの規則に合致すること。エコロジーの基盤に立って、経済理論を再考すること（現代経済学の成果の放棄ではなく）、これには前提におけるいくつかの深い転換が要求される

- ・経済的人間を共同体における人格として再考すること

共同体自体に起こっていることを真の経済発展の尺度とする。生産と消費の増大が共同体

を崩壊させるとき、それは経済的に肯定できるものではない

- ・経済的人間をその部分とする共同体は人間に限定できない

他の被造物と孤立しては繁栄できない、他の被造物の状態の改善は経済的利益である。

- ・共同体は未来へと広がっている

続く諸世代の幸福と他の種の未来の幸福は無視できない。

- ・共同体のメンバー（人間も非人間も）は他者に対する価値とそれ固有の価値とを持つ

- ・被造物の多様性は人間にとって重要な美的価値を増し加える

種の絶滅を避け、文化的多様性を保持する。

- ・科学技術をエコロジカルな仕方です適切なものとする

人間の必要を満たすことの犠牲を最小化する技術の使用。

- ・神はすべての被造物に配慮している

苦痛を軽減し楽しみを豊かにするために働くことの重要性。

6. グローバル化における経済と政治(508/7-510/1)

7. キリスト教—失敗と課題—(510/2,3)

①「われわれ西洋のキリスト教徒」(510/2)

信仰は愛の純粋に個人主義的な表現を越えて社会分析、社会倫理へと進むことを要求する。しかし、失望がある。環境危機への責任は主張されたが、ほとんど手つかずである。

②新しいヴィジョンを求めて(510/3)

われわれの失敗は、キリスト教信仰本来のものから帰結ではない。それは、むしろ、過去2世紀を特徴づけてきた思惟の分裂の進行を我々が受け容れてきたことの帰結である。いわゆる「専門家」を恐れすぎ彼らの前提を吟味するのに控えめすぎた。一切のものは相互に関連し合っており、エコロジーと経済学との区分を突破する機会と責任がある。

この惑星における人間の存在の仕方（持続可能なだけでなく、再生的な）へと社会全体を向かわせ得る新しいヴィジョンを提供するように求められている。

8. 政治の復権とキリスト教の責任

(3) まとめ

・環境と経済・政治とは一つの問題系を構成している。キリスト教思想研究は、問題系の再確認から議論を再構築する必要がある。そのための基礎理論としての自然神学の再考。

倫理的設定では射程が狭い。

・キリスト教思想の根本へ、そこから議論を構築すること。つまり、聖書解釈が争点となる。

<参考文献>

1. 山本良一、高岡美佳編、SPEED 研究会監修

『地球温暖化への3つの選択——低炭素化・適応・気候変化のどれを選ぶか』

生産性出版、2011年。

2. 池谷和信編『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か』

岩波書店、2009年。